

第9章 菩提心を摂受する

P166 ~ 167

懺悔の仕方 (8/27 野上さん担当)

懺悔の仕方は、どのように懺悔するかというと、四種類の力を通じて懺悔します。そのようにまた『説四法経』に、「マイトレーヤよ、菩薩大士は四つの法をそなえたなら、造って積んだ罪悪を制圧することになる。四つは何かというと、すなわち1) 能破の現行 [の力] と、2) 対治の現行 [の力] と、3) 罪過の遮止の力と、4) 依処の力です。」と説かれています。

Maitreya, when a bodhisattva mahasattva possesses the four powers, evil deeds and their accumulation will be defeated by them. What are they? They are: (1) the power of remorse 『後悔の力』, (2) the power of antidote 『(一切の悪行を正す) 対治の力』, (3) the power of resolve 『二度とその行為をしないという決心の力』, and (4) the power of reliance. 『よりどころ (帰依の対象である三宝) の力』.

対治の現行の力

対治現行の力は、罪悪の対治として善を行うのです。それにより漏は尽きます。

『アビダルマ集論』(訳註55)にもまた、「[力をもった] 所対治分の業は、力をもった対治の業を待つのです。所対治分が“果を[すでに] 投じてしまっても、対治の力により征服されるからです。」と説かれています。

そのようにまた「如来密蔵経」(訳註56)に、空性を修習したことにより罪悪は[無間業の大なるものさえも] 浄められることを、説かれています。『能断金剛般若経』(訳註57)には、甚深な[空性の] 契経を唱えたことにより罪悪は浄められることを、説かれています。『三誓言莊嚴王[タントラ](訳註58)と『妙賢所問経』(訳註59)には、秘密真言の念誦をしたことにより罪が浄められることを、説かれています。『花積陀羅尼』(訳註60)には、如来の塔廟に供養をしたことにより罪が浄められることを、説かれています(V127)。『如来像品』(訳註61)には、仏像を建立したことにより罪が浄められることを、説かれています。さらにまた、法を聴聞することと読誦することと書写することなど、何か善の業を信解して為す。それにより罪が浄められることを、説かれています。そのように(H58b) また『律阿合』(訳註62)に、「罪業を造ったものは善により滅させる。日・月が雲から出たように。この世間はそれにおいて照らされることになる。」と説かれています。

(2) Power of Antidote. 『(一切の悪行を正す) 対治の力』

The complete antidote to evil deeds is the practice of virtue. It causes the exhaustion of afflictions. (苦痛)

The Collection of [the] Abhidharma says: To oppose the karma of evil deeds, perform the antidote. Even if it has been created, the result of the nonvirtue can be transformed to something else by the power of the antidote.

The Treasury of the Thus-gone One says: Purify evil deeds by meditation on emptiness. The Diamond Sutra says: Reading the profound sutras purifies evil deeds. Establishing the Three Primary Commitments and the Sūbahu -Requested Sutra say: Recitation of the secret mantras purifies evil deeds. The Flower Heap Sutra says: Making offerings to the Tathagata's stupa purifies evil deeds. The Sutra-chapter on the Body of the Thus-gone One says: Evil deeds are purified by making images of the Buddha, and furthermore it is said evil deeds are purified by listening to teachings, reading texts, writing texts, and so forth, according to your interest in virtuous deeds. The Discourse on Discipline says: One who committed evil deeds Can purify them with virtue and Radiate in this world Like the sun and moon emerging from behind clouds.

対治（たいじ）仏教語大辞典

① 仏教修行のさわりとなる煩惱という悪魔を降伏し、さまざまな障碍を断ち切ること。

現行（げんぎょう）仏教語大辞典

① 現れること。現実の行為となって現れること。現実の行為として具体化すること。

漏（ろ）仏教語大辞典

煩惱の異名。また迷い。

「如来密蔵経」(訳註56)

十不善のうちでも大なるものを犯した場合でも、無我に悟入し、一切法に本来清浄を信賴、浄信するなら、その者は悪趣に往かないと説かれている。(後略)

『能断金剛般若経』(訳註57)

ここは無数の恒河の砂の世界を七宝で満たした場合より、『金剛般若』からの四句偈を受持して他者に説明するのなら、そのほうが福德が大きいというものであり、直接に罪惡の浄化を説くものではないが、(中略)『集学論』には『金剛般若経』の引用の後、「空性を信解することによってまた罪惡を浄めることになる。すなわち」といって『如来密蔵経』が引用されている。

『三誓言莊嚴王[タントラ](訳註58)

『三誓言莊嚴王タントラ』の百事真言と直後の『妙賢所問タントラ』の真言と念誦とそれによる罪の浄化が説かれている。(後略)

『妙賢所問経』(訳註59)

春の森が山火事の炎により、難なく密林がすべて焼かれるように、念誦の日に戒の風により燃やされて、大精進の炎により罪は焼かれます。雪を日の光が照らしたなら、輝きに耐えず解けるのと同じく、戒の日の光に念誦が照らしたなら、罪の雪もまた尽きるでしょう。真っ暗闇に灯火が生じたことにより、暗闇が残らず除かれるのと同じく、千の宿世から積んできた罪の闇は、念誦の灯火により速やかに除かれるのです。

ここで言う『善』は具体的なものとして

- ① 空性を修習すること
- ② 甚深な[空性の]契経を唱えること
- ③ 秘密真言の念誦すること
- ④ 如来の塔廟に供養すること
- ⑤ 仏像を建立すること
- ⑥ 法を聴聞すること
- ⑦ 法を読誦すること
- ⑧ 法を書写すること
- ⑨ 何か善の業を信解して為すこと

では、罪惡の対治として善を為すことそれもまた、どれほどか罪惡を為したそれほどの善を為すことが必要なのか、というなら、

そうではない。『大涅槃經』[梵行品に] (訳註63)に「一つの善を為しても、多くの罪を破壊するのです。」、「小さな金剛はスメール山を、または小さな火は草木を、または小さな毒は有情を破壊するように、小さな善もまた大きな罪を破壊するから、希求は大きいのです。」と説かれています。『金光明經』(訳註64)にもまた、「幾千の劫にきわめて耐えがたい罪惡を行った。一回よく懺悔したことにより、それらすべてが浄められることになる。」と説かれています。そのように(訳註65) 対治現行の力により罪惡を浄めることは、例えば、吐瀉物の泥に入った一人の人を泥から出して、沐浴させ、(V1 28)よい香りを塗ったのと似ている、と説かれています。

かつて、**ケーマカ少年**という、母を殺した罪人もまた、対治現行の力を行持(・実践)したことにより、罪が浄められて、天に生まれた。聖者、**預流**の果を得たのです。そのようにまた、[『親友書簡』(訳註66)に、)「かつて放逸であったのから、後で不放逸になった者はまた、雲を離れた月のように美しい。**ナンダ、アングリマラ、ダルシン、ケーマカ**のように。」と説かれています。

One may think that one must perform as many acts of virtue as he had nonvirtue.

That is not necessary. The Sutra of the Great Parinirvana says: Performance of even one virtue annihilates many evil deeds. And: For example, as a small vajra splits a **big mountain**, a small fire burns all the grass, and a small amount of poison kills sentient beings, in the same way a small virtue purifies great evil deeds. Therefore, it is important to make effort toward virtue. The Golden Light Sutra says: One who created abominable evil Over a thousand kalpas By confessing it all once Will be fully purified. To illustrate the complete purification of evil deeds by antidote, consider the example of a person who falls into a filthy swamp and after his escape takes a bath and anoints himself with fragrances.

In old times **Udayana**, the evil-doer who killed his mother, practiced the power of the complete antidote, purified his evil deed, was reborn in a god realm, and achieved the fruit of stream-entering. Thus it is said: One who lacks self-guidance And later possesses mindfulness Is like a radiant moon being freed from clouds. For example, Nanda, Angulimala, Ajatashatru, and Udayana.

スメール山 (Wikipedia)

(旧字体：須彌山、サンスクリット語ラテン翻字：sumeru) は、古代インドの世界観の中で中心にそびえる山[1]。インド神話のメール山、スメール山 (su- は「善」を意味する接頭辞) の漢字音訳語。

預流 (よる) 仏教語大辞典

《梵 srota-apannaの訳》 聖者としての流れにあずかった第一段階。

ケーマカ少年 『Dhammapada 心のお医者様ブツダ』より

ブツダへの布施第一の在家の信奉者であるアナータピンディカ大長者の甥であり、長者の子でもあるケーマカは、美男子でした。そのため、彼を見た女性は、誰もが魅了されて、われを失いました。彼もまた、他人の妻との付き合いを楽しんでばかりいました。

そこである夜、国王の家来たちは、ケーマカを捕え、王の前に引き出しました。王は、アナータピンディカ大長者に恥をかかせる事になると思って、何も言わず、ケーマカを放免(ほうめん)しました。

けれども、ケーマカは、慎(つつし)みませんでした。そこで、国王の家来たちは、ケーマカを2度も3度も捕え、王の前に連れ出しましたが、王は、その度(たび)に放免するだけでした。

アナータピンディカ大長者は、その事を聞いて、ケーマカを連れて、ブッダのところへ行き、事の次第を報告しました。そして、お願いしました。

アナータピンディカ大長者：「尊師よ、この者のために、どうか「法」をお説き、お示してくださいませようお願い申し上げます」

ブッダは、ケーマカのために心に響く話をされて、他人の妻に近づく事の罪過を示され、これらの詩「法句309,310」を唱えられました。ブッダが「教え・法」を説き示された終わりに、ケーマカは、聖者の最初の境地「**預流果**」に達しました。

それ以後、都の多くの人々は安らかに過ごしました、と。

「法句309,310」

放逸(ほういつ)・怠(なま)け者で他人(たにん)の妻(つま)に近(ちか)づく者は四つの事柄(ことがら)に遭(あ)います

功德(くどく)が無い

安眠(あんみん)できない

第三に非難(ひなん)を受(う)け

第四に地獄(じごく)に向(む)かいます

『(一切の悪行を正す) 対治の力』の説明で、なぜケーマカ少年が例として選ばれるのか。

『対治現行の力は、罪惡の対治として善を行うのです。それにより**漏**は尽きます。』

調べ切れていませんが、ケーマカは小さくても何か善を行ったのか。

訳註54より

良家の子で〔で給孤独長者の甥〕ケーマカも、非如理の作意によって他人の妻と交合しようとする錯誤により母を殺した。それから如来の教えにのみ依った。糸玉を投げたように地獄の金剛から解脱した。天井世間の安樂を経験したと、知られている。

罪過の遮止の力

罪過を遮止する力は、異熟 [の果報の苦]を怖れて、以降は罪を中止し、[律儀により] 防御するのです。そのようにまた『入行論』に(訳註67)「導師たちは私の罪を過ちであると(H59a) 受けとってください。これは善くないことなので、以降、私はけっして行いません。」と説かれています。

そのように罪過を遮止する力により罪を浄めることは、例えば、侵食のある河の水路を変えるのと似ている、と説かれています(訳註68)。かつて女に貧着する罪をもった [釈迦牟尼の]従弟の**ナンダ**という人もまた、罪過を遮止する力を行持 [・実践] したことにより、罪惡を浄めて、阿羅漢の果を得たのです。そのように、[『親友書簡』(訳註69)に、]「かつて放逸であったのから、後で不放逸になった者はまた、(V129)雲を離れた月のように美しい。**ナンダ、アングリマーラ、ダルシン、ケーマカ**のように。」と説かれています。

(3) Power of Resolve. 『二度とその行為をしないという決心の力』

Through fear of the causes ripening in the future, one ceases to commit evil deeds. Engaging in the Conduct of Bodhisattvas says: I beseech all the Guides of the World To please accept my evils and wrongs, Since these are not good, In the future I shall do them no more. All evil deeds are purified by the power of resolve as if turning the course of a dangerous river. In old times Nanda,¹⁰ the evil-doer who was very attached to a

woman, attained the fruit of Arhatship by purifying rifying his evil deeds through the power of resolve. Thus it is said: One who lacks self-guidance And later possesses mindfulness Is like a radiant moon being freed from clouds.

For example, Nanda, Angulimala, Ajatashatru, and Udayana.

ナンダ 阿難（アーナンダ）【あなん】

釈尊の弟子。サンスクリット、パーリ語ともにアーナンダ。漢訳では「阿難」「阿難陀」などと記される。釈尊の従弟であり、釈尊入滅まで25年間侍者として常随していた。このために釈尊の説法を聴聞することが特に多かったので、「多聞第一」とたたえられた。釈尊入滅後に行われた最初の聖典編集会議（第一結集）では經典の誦出を担当し、經典編集の中心人物となった。摩訶迦葉（マハーカーシャパ）とともに教団では進歩的な立場をとり、その後の教団拡大に重要な役割を果たしたとされる。最期は自ら身を焼いて亡くなったとの伝説もある。『仏説無量寿経』『仏説観無量寿経』では釈尊の説法の相手である対告衆となった。釈尊「十大弟子」の一人

彼は美男子ゆえに、女難を被ることが度々あったと言われるが、志操堅固にして身を護り修行を全うした。また智慧多くして諸経を持誦していたが、心を損する点に欠け、定と慧が均等でなく、漏尽通を起すことができず、仏の入滅時には未だ有学の人で阿羅漢果を得ていなかったと言われる。

『二度とその行為をしないという決心の力』で、なぜナンダが選ばれるのか。
※これ、俗世間では一番信用したらあかんやつじゃない？

訳註54より

ナンダというのは、貪欲の大きな釈迦族の青年〔である、シャキー二・ム二の従弟〕がいた。彼は自分の妻にきわめて執着したので、彼女がいなくては須臾（しゅゆ：ほんのしばらくの間）も喜びを経験しなかった。そのような彼は如来により家から出されて出家した。出家しても昼夜に彼女だけについて尋思したが、法についてはそうでなかった。そのような者に如来は阿羅漢を得させたことに関してである。

『夢をかなえるゾウ 水野敬也著』より P115

課題:決めたことを続けるための環境を作る

(前略)

「自分は、今日、テレビを見いひんて決めたやんな？」

「はい」

「これ、何が変わった？」

「何が変わったか、ですか？」

「何も変わってへんやろ」

「い、いや、そういうわけではないでしょう。僕はテレビを見ないと決めたんですから、意識が変わったんじゃないですか？」

「今から言うことは大事なことやから覚えときや。人間が変わろう思ても変わられへん最も大きな原因は、このことを理解してないからや。ええか？ 『人間は意識を変えることはできない』んやで」

「意識を変えることはできない…」

「そうや。みんな今日から頑張って変わろう思うねん。でも、どれだけ意識を変えようと思ても、変えられへんねん。人間の意志なんてめっちゃ弱いねん」

「それは、そのとおりです。人はみんな自分で決めたことがなかなかできません」

それでも、みんな『意識を変えよう』とするやん？ それなんで分かるか？」

「さあ？ どうしてですか？」

「『楽』やからや。その場で『今日から変わるんだ』て決めて、めっちゃ頑張ってる未来

の自分を想像するの楽やろ。だってそんな時は想像しとるだけで、実際にはぜんぜん頑張っ
てへんのやから。つまりな、意識を変えようとする、いうんは、言い方変えたら『逃げ』
やねん」(後略)

依処の力

依処の力は、三宝に帰依することと、最上の正覚に発心することです。そのようにまた、
最上の(三)宝に帰依したことにより罪が浄められることは、『猪の因縁』(訳註70)に、
「仏陀に帰依した者一彼らは、悪趣に行かないでしょう。人の身体を捨ててから彼らは
天の身体を得るのです。」などと説かれています。

(4) Power of Reliance. 『よりどころ（帰依の対象である三宝）の力』

The power of reliance is taking refuge in the Three jewels and cultivating the mind toward supreme enlightenment. Purifying evil deeds by taking refuge in the Triple Gem is mentioned in the Expression of the Realization of Sukari: One who takes refuge in the Buddha Will not be reborn in the lower realms. By leaving the body of humans One will attain the body of gods.

『猪の因縁』(訳註70)

『仏説嗟鞞囊法王子受三帰依獲免悪道経』に、帰依による罪の浄化を説く箇所はこの因縁
譚を比喻とすべきだという。

ガルチェン・リンポチェ法話集2 清浄の道 P7

「三宝に帰依します。すべての罪と不善を懺悔します。衆生の善に随喜します。菩提に至
るまで仏の正等覚を把持します。仏法僧の三宝に、自他の二利をあまねく成就するため帰
依します。無上等覚へ菩提心を起こし、一切有情を客として歓待します。一切を喜ばせる
優れた菩薩行を行じます。一切衆生のために菩提を成就できますように」

『大涅槃経』(訳註71)に、「三宝に帰依したことにより、無畏を得ることになる。」
と説かれています。最上の正覚に発心したことにより罪を浄めることは、『聖茎莊嚴経』
(訳註72)に「不善の一切法を尽きさせるので、地下*のようなものです。過ちすべて
を燃やすので、劫火のようなものです。」と説かれています。『入行論』(訳註73)にも
また「きわめて耐えがたい罪を造ったとしても、勇者に頼って大きな怖れ [から解放さ
れる]ように、(V130)それに頼って(H59b) 須臾に解脱するでしょう。放逸である者
たちはなぜ、それに頼らないのでしょうか。」と説かれています。

The Sutra of the Great Parinirvana says: By taking refuge in the Triple Gem, One will achieve the state of fearlessness. Purifying evil deeds by cultivating the mind of supreme enlightenment ment is mentioned in Planting the Noble Stalk Sutra: It causes exhaustion of all nonvirtues like burying them underground. ground. It burns all faults like the fire at the end of a kalpa. Engaging in the Conduct of Bodhisattvas says: Like entrusting myself to a brave man when greatly afraid By entrusting myself to this [Awakening Mind] I shall be swiftly (素早く) liberated Even if I have committed extremely unbearable evils. Why then do the conscientious not devote themselves to this?

地下*

※は梶山監訳は「パーラータ (坑葬)」と音写し、「地下の七地獄の一つで蛇などが住む」と解説する。

須臾（しゅゆ）仏教語大辞典

《梵 muhurtaの音写「牟呼栗多（ムリタ）の訳。一昼夜の三十分の一。またはksanaの訳ともされる。短い時間を表す》 しばらくの間。すこしのひま。暫時。つかの間。

そのように依処の力により罪を浄めることは、例えば、困窮した者が力の大きな者に掴まる、または毒に真言をかけたのと似ている、と説かれています(訳註74)。かつて父を殺した**ダルシン王子**〔・アジャータシャトル〕という罪人もまた、依処の力を持行〔・実践〕したことにより、罪を浄めて菩薩になったのです。そのようにまた〔『親友書簡』(訳註75)に、〕「かつて放逸であったのから、後で不放逸になった者はまた、雲を離れた月のように美しい。**ナンダ、アングリマラ、ダルシン、ケーマカ**のように。」と説かれています。

Thus, the power of reliance purifies all the evil deeds like being protected by a powerful person" or like poison expelled by mantras." In old times, **Ajatashatru**," the evil-doer who killed his father, purified his evil deeds and became a bodhisattva by practicing the power of reliance. Thus it is said: One who lacks self-guidance And later possesses mindfulness Is like a radiant moon being freed from clouds. For example, Nanda, Angulimala, Ajatashatru, and Udayana.

アジャセ（阿闍世・アジャータシャトル）

アジャセは、インド最強のマガダ国の王、ビンバジャラ（頻婆娑羅・ビンビサーラ）王の太子でした。成長すると、父王を殺して王位を奪い、母・イダイケ（韋提希・ヴァイデーヒー）を幽閉しました。

心理学では、父親に敵意を持つエディプスコンプレックスに対して、母親を恨むことを阿闍世コンプレックスという言葉になっています。

このような、親殺しという重い罪を造ったアジャセですが、やがて仏教を聞いて、生きている時に絶対の幸福に救われます。そのことは、親鸞聖人の主著『教行信証』に詳しく教えられています。

『よりどころ（帰依の対象である三宝）の力』で、なぜアジャセが選ばれるのか。

訳註54より

ダルシンはアジャータシャトル。彼は瞋恚をもった者。すなわち彼は不善の友（デーヴァダッタ）と出会った。そしてかつての怨恨に拘ったので、〔マガダ国の〕法に適った父王〔ビンビサーラ〕を殺した。彼も善知識・如来の教えにのみ依って地獄の火の薪より解脱した。

『さとりとすくい 涅槃経を読む 小川一乗著』より

P254

王もし罪を得ば、諸仏世尊もまた罪を得べし。何をもつての故に。汝が父である、先王頻婆沙羅は、常に諸仏において、諸の善根を種う。この故に今日、王位に居ることを得るなり。諸仏もしその供養を受けざれば、すなわち王とならず。もし王とならざれば、汝はすなわち国の為に害することを得じ。もし汝は父を殺して、まさに罪あるべくば、我ら諸仏もまた罪あるべし。もし諸仏世尊に罪あることなくば、汝ひとりいかに罪を得んや。必ず地獄に墜ちるといことがどうして言えようか。

（中略）

あなたは父親を殺して罪をつくったと苦悩しているけれども、もし父親が王でなかったらならば殺していないであろう。しかもなぜ頻婆沙羅王は王であったのか、それは仏法に深く帰依し、仏教の教えによって国を治めていたがために、今日まで国王であり得ていたのである。だから、もし阿闍世自身に罪があるとなれば、父親が王として存在していることによって殺さざるを得なかった、その頻婆沙羅王を王として支えていたのは、王に対して説法をしていた私なのだから、阿闍世に罪があるならば私にも罪があるのだと釈尊はい

うわけです。ここまで言われたら阿闍世は泣かざるを得ません。その罪はあなただけの罪ではなく、私にも罪があるんだと釈尊は言われるのです。釈尊がいなければ頻婆沙羅は王ではないし、頻婆沙羅が王でなければ阿闍世も父親を殺すことはなかったのです。親が王でなければ殺す必要もない、王であったがために、そういう関わりあいの中で父親を殺してしまっただけでも、もしそれを罪として一人で悩むのであればそれはあなた一人の悩みではない。

私たちは日頃そうした考え方がなかなかできません。毎日のように、新聞を賑わせている様々な若者の犯罪について考える時に、こそれはこの社会を作ってきた私たちの責任でもあるのですから、そう考える人が増えてきたら、もっとよい社会に変わるのではないのでしょうか。「若い者が悪い、先生が悪い、親が悪い」という問題ではなしに、みんな私に関わる問題である。私も荷担して作った社会の中で若者が犯罪を犯した。若者を単に責めるだけでなく、因縁・関係性の中で、そうしたことをせざるを得ない状況に彼らが置かれていった、あるいは、そういう世界に彼らを追込んだのは一体誰なのか。この私もその一人なのだと考えていくところに、お互いを共に生きる存在として見つめていく、仏教のすごいところがあります。

四つの力すべてにより懺悔して罪を浄化する

そのようにそれら力の各々もまた罪を浄めることになるのなら、四つともにより懺悔したなら、もちろんです。そのように懺悔したことにより罪が浄められたことの兆相もまた、夢に出てきます。『準提陀羅尼』(訳註76)に、「[罪が浄められた相が夢に見えるまで、念誦すべきです。すなわち、] 夢において悪い食べ物を吐くことと、酪(ヨーグルト)と乳などを飲むことと、日と月を見ることと、虚空を往くことと、火が燃えることと、水牛と黒い人を制することと、比丘と比丘尼の僧伽を見ることと、出乳樹と象と牛王と山と獅子座と宮殿の上に昇ることと、聞法することなどを夢見たなら、罪を離れるでしょう。」と説かれています。

(以上、)罪の懺悔を説明しおわりました。

If evil deeds can be purified by even one individual power, why would they not be purified by all the four powers together? Signs of the purification of evil deeds appear in dreams.

The Invoking Dharani says: If in a dream we are vomiting bad food; drinking yogurt, (ヨーグルト) milk and so forth; seeing the sun and moon; walking in the sky; seeing blazing fires; able to subdue buffaloes and persons wearing black clothes; seeing a gathering of bhikkhus and bhikkhunis; climbing on a milk-producing tree, (牛乳を生産する木) or on an elephant, bull, mountain, lion throne, or mansion; or hearing Dharma teachings and so forth, it is a sign of separating from evil deeds. This concludes the explanation of the purification practices.

酪(ヨーグルト) 仏教語大辞典

《牛乳から作るヨーグルトのようなもの。五味の一つ》 ①律では、無病に対して酪を請うことを禁ずる。②法相宗では、縁覚に喩え、天台宗では、五時のうち、阿含時に喩える。

経典にも乳製品 (メグミルクHPより)

仏教の経典に「牛より乳を出し、乳より酪(らく)を出し、酪より生酥(なまそ)を出し、生酥より熟酥(じゅくそ)を出し、熟酥より醍醐(だいが)を出す、醍醐は最上なり」と記されています。これらは今でいうヨーグルトやバター、チーズなどのような乳加工品と推測されています。醍醐味(だいがみ)という言葉もこの“醍醐は最上”に由来したといえます。

出乳樹 () → **乳樹** (ちちのき) ネット辞書

イチョウの別称

→ **乳木** (にゅうもく) ネット辞書

仏教で護摩に用いる薪の一種。乳汁の多い桑などの生木を用いる。

吉夢？ 吉祥？ 験し？

- ① 悪い食べ物を吐くこと
- ② 酪(ヨーグルト)と乳などを飲むこと
- ③ 日と月を見ること
- ④ 虚空を往くことと
- ⑤ 火が燃えること
- ⑥ 水牛と黒い(服を着ている)人を制すること
- ⑦ 比丘と比丘尼の僧伽を見ること
- ⑧ 出乳樹と象と牛王と山と獅子座(lion throne ライオンの玉座?)と宮殿の上に昇ること
- ⑨ 聞法する(hearing Dharma teachings ダルマの教えを聞く)こと

→を夢見たなら、罪を離れるでしょう。

アングリマーラ (ネット記事より)

後にお釈迦さまの弟子になるアングリマーラという者がいました。アングリマーラ経という経典の中に登場します。インドのコーサラ国の首都・舎衛城に現れた殺人鬼です。アングリマーラは人を殺しては、その指を切って首飾りを作り、首にかけていました。「アングリ」とは「指」、「マーラ」は「首飾り」という意味です。

舎衛城の人達は、夜な夜な出没しては人を殺し、指を切っていく殺人鬼に震えあがっていました。コーサラ国の波斯匿王は軍隊を率いてアングリマーラを退治しようとしませんが、アングリマーラは神出鬼没でつかまりません。ある時、お釈迦さまが、人々が恐れおののいているという噂を聞かれ、「私が教化しよう」とアングリマーラのところに行こうとされました。「お釈迦さまが殺されては大変だ」と周りの人々は止めたのですが、「いや、心配は無用だ」と言われ、出かけて行かれました。するとアングリマーラが現れたのです。すぐにアングリマーラはお釈迦さまを殺そうと襲いかかるのですが、お釈迦さまの神通力によってその衣に触れることもできません。アングリマーラは狂ったように追いかけるのですが、どうしてもお釈迦さまに追いつくことができません。ついに疲れ果て、追いかけることをやめました。そこでお釈迦さまは尊い教えを説かれ、アングリマーラを教化されたのです。お釈迦さまの教化はアングリマーラの仏性に染みたのです。アングリマーラは深く懺悔をし、その場で仏弟子になることを願い出しました。

仏弟子となったアングリマーラはほかの弟子と同じように托鉢に出かけます。しかし殺人鬼だった男に人々がいい顔をするわけがありません。食べ物をくれるわけがありません。それどころか石を投げたり、殴りかかってくる者もいました。そうした仕打ちに来る日も来る日も耐えながら、アングリマーラは托鉢に出たのです。

ある日、アングリマーラは路上で苦しむ一人の妊婦に出会いました。`どうにかしてあげたい、という慈悲心からお釈迦さまのもとへすぐに帰って、「妊婦さんを助けてあげたいのです。子どもを無事に産ませてあげたいのです。どうにかなりませんか」と懇願しました。そこで、お釈迦さまは「その妊婦さんに手を合わせて『ご婦人よ、私は生まれてよりこのかた、生き物の命を故意に奪ったことがない。この真実の言葉の力によりて、あなたとあなたのお腹の赤ちゃんに安穩あれかし』と言いなさい」と言われました。

インドには古来、真実の言葉には不思議な力が宿るという信仰があります。お釈迦さまは「その真実の言葉の力をその女性の前で発揮せよ」と言われたのです。しかし、アングリマーラはお釈迦さまに「私は多くの人間を殺してきました。`生まれてよりこのかた、生き物の命を故意に奪ったことがない、とは言えません。それは真実の言葉ではありません」と言いました。それに対してお釈迦さまは「私の言う通りにしなさい」と言われました。意を決してアングリマーラが女性に向かって、言われた通り唱えたと、その瞬間に赤ちゃんが生まれたのです。アングリマーラは生まれ変わっていたのです。「仏口所生」となっていたのです。

これは、たとえ殺人鬼と言われるような人でもお釈迦さまの教えに深く帰依して慈悲心を持つことで、生まれ変わることができるという大変ありがたいお話です。

アングリマーラと京アニの容疑者

本文中に『ナンダ、アングリマーラ、ダルシン、ケーマカのように』と何度も出てきますが、私の感覚としてアングリマーラの罪がダントツに重い気がします。けれど、アングリマーラはお釈迦様に帰依をして仏弟子となり、今生にいながら『生まれ変わった』と書かれています。

この物語の語る場所は何なのでしょう。犯罪者(容疑者)の視点に立てば、アングリマーラまでひどいことはしてないとはいえ、自分の犯した罪も『今』心を入れ替えれば許される、ということを知っているのでしょうか。「一人殺すのも二人殺すのも一緒だ」と自暴自棄に開き直られるより、『今反省した』や『ひどい罪を犯したが懺悔すれば許される』のはありがたいとも思います。

『罪とは何か』、殺された家族の視点に立てば、愛する者を理不尽に殺した者を、『今反省した』からと許す気にはなれない気がします。上記の物語に出てくる人たちの様に『布施』する気にもならないと思います。

京アニを放火した容疑者も、まだ入院して「生かされて」いるのかな。ある意味、我々の税金で賄われているとしたら、アングリマーラのような彼に布施をしているのかもしれない。リンポチエに質問したら、仏教の教えににそった答えが返ってきそうですが、どうなのでしょう。

「愛する者を殺される」…これも自分の過去生のカルマとして納得するしかないのでしょうか。

『四国遍路 辰濃和男著』

P 185

「やくざやっていたんですよ。自分は」

とヒゲさんはいった。

どう応じたらいいのだろう。左手を見た。小指がなかった。

(中略)

「四国を歩いていて思うのは、人の情けです」ヒゲさんはいった。

「自分のようなものを呼び止めて、ふろに入れてくれて、食事をだしてくれる人がいて、なぜこんなに情けをかけてくれるのかと。今まで自分がいた世界と逆の世界ですからね。罪業を重ねてきた自分に対してなぜこんなにもよくしてくれるのかというまどいがある、はじめは、ありがたいと思いながらも、むしろつらかったですね」

語っているうちにその目にふとあふれでるものがあった、私は目をそらした。汗が目に入ったのかなとも思った。慟哭、というおおぎょうな言葉はあまり使いたくないが、このときのヒゲさんの言葉には「哭く」という字をあてはめるほかはない思いが感じられた。

極道の世界にいた男に「人の情けがつかった」といって哭かせるほどのものが、このへんろ道にはあったのだろうか。

自分が生きてきたものの重みを肩に背負って、この人は歩いているのだと思った。私の思いを見透かしたようにヒゲさんがいった。

「午後になると肩が痛くなりますね。この荷物の重さは罪の重さです」

どこかのご住職にそんなことをいわれたのだろうか。それとも、自問自答のすえにでてきた言葉なのか。ちょっとよそゆきの、そんな言葉を使って男は去り、去りながら振り返って欠けた歯の笑顔をみせた。

三十七の菩薩行

煩悩に負け他なる菩薩らの
罪を語れば自分が衰える
大乘学ぶ全ての人の
罪を言わぬが仏子菩薩行(32)

京都新聞

2020年3月13日

社説：仏教界と死刑 命の尊厳問う議論深く

死刑をめぐる議論が仏教界で進められている。主要59宗派が加盟する全日本仏教会（全仏）が1月末に、死刑廃止について理事長談話を出した。「私ども仏教者は、仏さまの教えに基づいて（中略）どのように捉えていくかが問われています」との認識を示し、社会とともに議論を深めていくとしている。

これまでの死刑議論は、主に司法や人権の観点からだ。全仏は、宗教者が向き合う「命の尊厳」の見地から考えていくという。宗教界が、心や死への深い洞察に基づき、死刑に向き合う意義は大きい。社会に開かれた議論となるよう、期待したい。

一方で、死刑を望む遺族の心に、宗教者はより目を向けてほしい。募る応報感情や葛藤に接し、苦しみを和らげるのも、大切な役割ではないだろうか。

死刑をめくり、世界の宗教界で大きな動きがあった。一昨年夏、ローマ・カトリック教会が死刑制度に全面的に反対する方針を打ち出している。日本では真宗大谷派（本山・東本願寺）が、かねて死刑制度に反対し、刑執行のたびに停止を求める声明を出してきた。

死刑廃止を鮮明にするのは1宗派だけで、全仏が組織全体で議論する意味は重い。1年かけて7回の審議を重ね、昨年12月に答申。これを受けての理事長談話だ。答申の中で、釈迦（しゃか）の不殺生の教えと死刑は「相いれない」と踏み込んだが、理事会で承認されなかった。遺族感情などさまざま課題に対し、議論を続ける必要があるとの理由からだ。

私たちが死刑制度について考える必要がある。4月に京都市で「国連犯罪防止刑事司法会議」が開催予定で、その国連は1989年の総会で死刑廃止条約を採択している。新型コロナウイルス感染拡大で会議は延期の方向で調整中だが、この機会に死刑について改めて議論したいところだ。

内閣府が1月に発表した世論調査では、80%超が「死刑もやむを得ない」と答えている。死刑存続の根拠の一つだが、これで国民の意思とするのは早計だ。終身刑を導入した場合を問うと、存続52%、廃止35%と意見は割れる。

死刑容認の最も多い理由は、遺族感情への配慮だ。終身刑を導入し遺族配慮などを司法制度に組み入れたら、判断はどう変わるか。加えて、宗教者が語る「命の尊厳」に耳を傾けてみたい。死刑に目を背けてはならないだろう。